

「特集」

過疎ニモ負ケズ、 高齢化ニモ負ケナイ 「地域づくり」

「できれば健康で、住み慣れた家で、安心して暮らし続けたい」年齢とともに、そう感じる人は多いのではないだろうか。

しかし、少子・高齢化、地域の過疎化が進むと、そういった日常生活を送ることが難しくなることもあります。

これは、全国的に起こっている深刻な問題ですが、また同時に、「地方創生」の言葉に見られるように、「地域の力」の有無が問われ、私たちの暮らしや将来を左右する重要な時代を迎えています。

今回の特集は、今後、どうやって地域で安心して・充実した暮らしを送ることができるのか、町が考えている取り組みをご紹介します。みなさんも、5年後、10年後のご自身に置き換えていっしょに考えてみませんか。

町の過疎・高齢化は

玖珠町の人口は、現在、約1万5千人です。



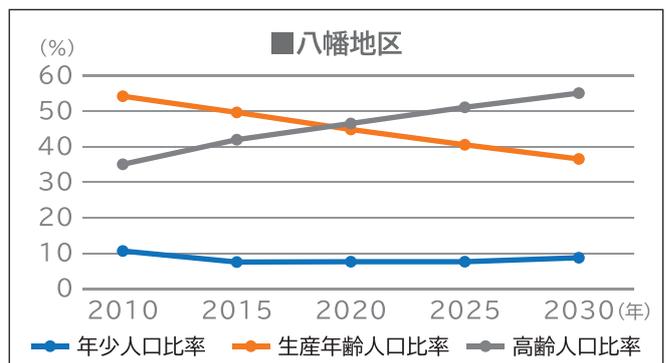
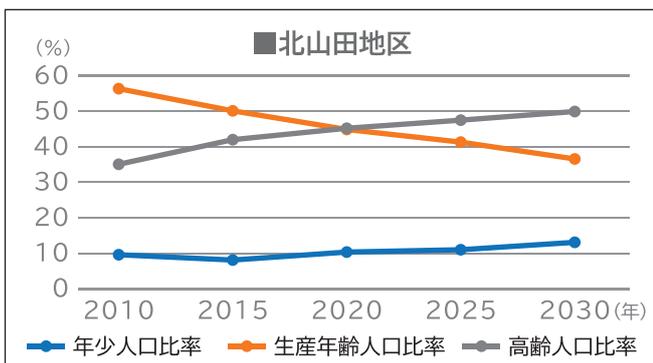
ポイントその1

「都市計画区域」とは、町の中心部です。大字塚脇と大字山田・大隈・森・帆足・岩室の一部のエリアです。

左記のグラフで分かるように、**わずか4%の都市計画区域内の中に、約66%の人口が集中、逆を見ると、周辺地域の人口減少・過疎が進んでいるということがわかります。**

ポイントその2

「玖珠町人口ビジョン」(平成27年に町が作成)の中で、全町的に、生産年齢人口(15~64歳)と、高齢人口(65歳以上)の割合が、逆転に向かい、高齢人口の割合が上回る傾向です。特に、北山田、八幡地区は、2020年頃を境に、高齢人口が大きく上回ることが分かっています。



自治区の実態は

町には約280の自治区があり、うち、**15世帯以下の自治区が半数を超えています。**

また、5戸以下の自治区も28自治区あります。

高齢者が多くを占める自治区は年々増え、自治委員になる人が減ったり、地区の清掃や、何かあった時の隣近所の助け合いなど、自治区本来の共助の役割を行うことが難しくなっています。

また、核家族化の進行で自治区離れが進んでいます。

このため、町では、将来的な人口減少や高齢化に対応するため、十数年前から自治区の再編を働きかけています。これまで、自治区の方の意思で、3つの自治区が近隣地区と合併しました。

自治区の再編は、そこで暮らす人々にとって様々な事情もあるため、町は期限を決めず、現状維持も含めて考えています。その中で、継続的に幅広い意見を聞きながら、望ましい自治区のあり方の検討を、今後も住民の方々が行っていきます。

【自治区の再編についてどう思いますか？】

「早くこういう検討会をして欲しかった」
 「各自治区で、十分な話し合いが必要」
 「地区で話して良い方向に考えていかないと、今後が不安」、「自治区の再編は、地域の課題として捉えるべき」
 「現状のままで良い」
 「自治区の再編は、必要だと思う」
 「合併すると役員の仕事が多くなるのではないか」、「伝達がしにくくなり、活動が低下するのではないか」、「合併しても高齢者が多くなることは変わらない」、「各自治区間が遠くなるのではないか」など

平成29年度から30年度にかけて開催した自治区再編の検討会で出されたご意見の一部

朱書き部分は特に高齢者が多くを占める自治区で、近年増加しています。

■自治区の戸数の現状

(H30年4月1日現在)

		森	玖珠	北山田	八幡	合計
世帯数(世帯)	高齢化率	38.4%	32.8%	42.3%	46.6%	37.7%
	1~5	18	3	3	4	28
	6~10	40	11	8	23	82
	11~15	26	20	9	10	65
	16~20	13	8	9	4	34
	21~30	9	16	8	6	39
	31~	8	20	3	1	32
	合計	114	78	40	48	280

175戸 (63%)

コミュニティ運営協議会の役割

平成18年、玖珠町は、森・玖珠・北山田・八幡の各地区にコミュニティ運営組織を作りました。その役割は、行政ではできない地域活動の対応や地域の活性化です。

主に、教育文化・福祉・生活環境・地域づくりなどを通じた地域の振興を考え、進める団体です。

多くの住民の方々が様々な形で、コミュニティ活動に参加しながら、地域を盛り上げています。

役割が混同？

コミュニティ運営協議会は、地域を振興する組織です。

一方で、自治区は、地縁によりつながった住民が助け合いながら自治区の行事や問題の解決、また、高齢者の見守りなどを行う組織です。

しかし、近年、一つの自治区のみではこれまでのような活動ができにくくなっている実態が

あり、その役割が、コミュニティ運営協議会へ依存される傾向にあります。



森地区コミュニティの人々が行っている玖珠インター前の花壇の花植え。約10年間続けられています。

問題の実態は

自治区によっては、人口の減少などで、「これまで自治区で行ってきた行事や作業ができなくなった」「世話が行き届かない」。そんな様々な問題を、どうやって解決したらいいのか、今後、過疎化・高齢化が進む中で、深刻な問題です。

このような中で、将来を見据えて取り組んでいる地域、人々も町内にはたくさんいます。

次頁では、地域の方々にお話を伺った内容をご紹介します。

暮らす人みんなの力が必要

地域によって異なる様々な実態
今回、2名の方にお話を伺いました。



地域の高齢化、過疎化

難しいとばかり言っている訳にはいきません。高齢者の一人世帯や病気の方、独居世帯も多いですが、高齢者が住みやすい地区にしたいです。

田舎ならではの良さ、隣近所で声を掛け合って見守る・助け合うという環境をつくる必要があります。

地域の人材と世代間のつながり

祭りなどの行事、祇園などはどこから来たのかというくらい若い人たち、森地区商工青年部、祇園保存会の人々など、たくさんの人たちが支えて盛り上げてくれます。

また、こういった機会が、若い人々と高齢者との話すきっかけでもあり、「こうしたらいい」とか、いろんなアイデアが生まれるのも、若い人たちのお陰だと思っています。

高齢者が多い中で、改めて「地域づくりって何だろうか」と考えることがあります。そこに住む人たちが一緒になって問題解決をする、地域が一体になって、暮らしやすい、楽しい所になりたい、そのためには住民の参画が不可欠なのかなと思います。

自治区の課題

自治委員になる人がなかなかいません。役員になると責任を押し付けられるという思いもあるでしょう。

でも、自分が住んでいる自治区だから、少し考えてくれたらなああと、毎年切り替えの時期になると思います。

一方で、自治委員だけでは目の行き届かない所も多々あります。例えば、自治委員と民生委員の役割が重なったり、双方からもれてしまっている所もあります。

普段、地域の中で、誰でもあったら、声をかけるようにしています。声掛けは大切だと思います。初めての人には警戒されがちなものもありますが、継続することが大切です。お互いに分かり合っているように話していくことが大切です。お互いを知ると、話したくないようなこ



加来 直幸 さん (森・鬼丸)
森地区コミュニティ運営協議会会長
森地区自治委員協議会会長

とまで話してくれます。

コミュニティ組織と町の連携

コミュニティも自治委員も、行政や各種団体、協議会など様々な会やあて職とか、本来の仕事以外の仕事が増えて忙しくなっています。改善策を考える必要があると思います。

そして、誰が高齢者を支えていくのか。高齢者が高齢者を支えていく仕組みを考えていかなければならない、そのためにはどうやっていけばそれが成り立っていくのか、様々な連携の中で考えて解決する方法を見出していく必要があると思います。



地域の人々の絵や写真を街並みに飾って町の賑わいを取り戻そうと始まった「森街なみ文化祭」。地元の人々の力で、12回を迎えました。古民家や蔵を利用したコンサート、また、豊後大友鉄砲隊の武者行列など、年ごとに賑やかになっています。

学校廃校を機に深めた地域の輪

浦河内地区振興会のはじまり

昭和49年、北山田地区内の小学校が統合して、同年4月に北山田小学校が開校しました。地域の拠点だった大野原小学校が無くなり、みんなで何とかしようと大野原（現・浦河内）地区振興会を立ち上げました。

地域広報誌「浦河内」の発行

広報誌「浦河内」は、平成10年8月に創刊、21年目に入り、今月25日発行で247号になります。みなさんからは、「よう書くことがあるねえ」「いつも楽しみにしている」と言われるとやっぱり嬉しいです。アンテナを張っていれば何か書くことはあるもんです。紙面に穴があると軽トラで地区内を回ります。この道路が傷んできるとか、河川がどうだとか発見だらけです。

地区の少子・高齢化

年1回は、人口減、少子・高齢化が進む浦河内の実態の特集記事を掲載しています。これは、21世紀に入った時、今後、地域の人口はどうなっていくのかと危惧を持ったのがきっかけです。毎年5月末現在の地域内の自治区の人口を、6月号に載せています。2001年に884人だっ



た人口は、2018年の5月には673名になりました。

人が減ったのを、最初に肌で感じたのは体育祭でした。浦河内地区は、14地区が5方面に分かれています。振興会ができてから、ふるさと祭りと体育祭を隔年で開催してきました。しかし、5年前、若い世代がいないう地区でリレーの種目ができなくなりました。議論をし、全戸にアンケートをとり、体育祭は中止しました。今は、有志で三日月の瀧公園で、パークゴルフ大会を毎年開催しています。

地域の助けあい・連携

一人暮らしの高齢者もいますが、地区ごとで月に一回開催している「いきいきサロン」が、高齢者への声掛けや見守りなどの役割を補えて

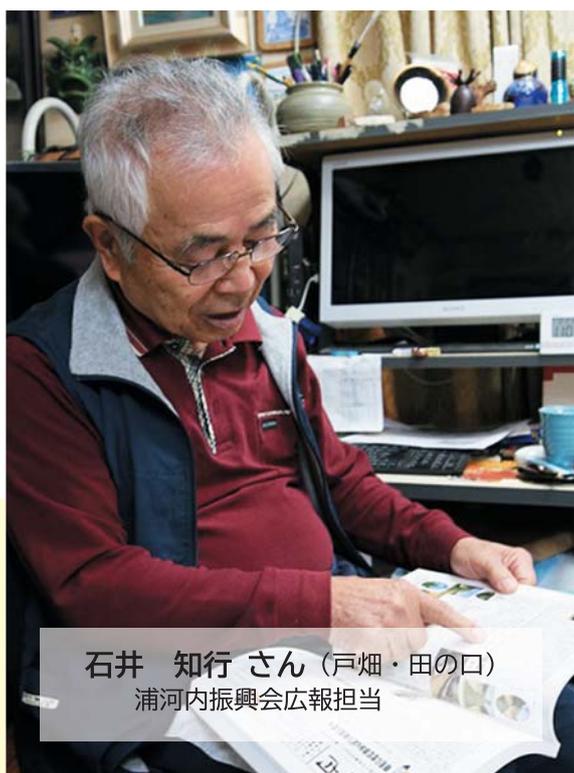
いると思います。災害時の連絡・避難先なども老人クラブが行っています。

また、地区内には浦河内川が流れていますが、毎年2回、のべ200名の方が出て、河川の清掃と、県道の草刈りをしています。昔は、自転車や布団など、いろんなものが川に捨てられていました。

今は、自然環境を守ろうという意識が地域全体に浸透して、河川への不法投棄はなくなりました。

一方で、今後の見通しは厳しいと思うことがあります。その一つとして、農業の担い手が減っていく中で、農村集落が維持できるのかという問題です。

そのためにも、何があってもみんなで作るといふ地区の協力体制が必要だと思えますね。



石井 知行 さん（戸畑・田の口）
浦河内振興会広報担当

昨年7月号で創刊20年を迎え、浦河内振興会は、既刊の全紙の縮印版（2巻）を発行しました。6年前に石井さんが入院した際も、病室にパソコンを持ち込んで編集、コツコツと続けてきたあゆみと、地区の実態・変容が凝縮されている貴重な冊子です。



新たなマンパワー

「集落支援員」

これまでふれてきた地域の課題・問題の解決策の一つとして、町は、従来の組織に加えて、より専属・特化した新たなマンパワーが必要だと考えています。

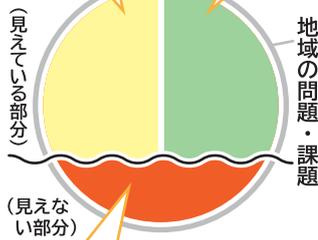
その中で、国（総務省）の事業である集落支援員制度の活用を検討しています。

「集落支援員」は、複数の集落にまたがって、巡回を行いながら、地域の問題や課題、困っていることなどを調査して、役場や関係する組織・団体と連携しながら、解決のための仕組み・機運づくりを行うことが仕事です（週に約40時間、報酬有）。

集落支援員の仕事のイメージ

自治委員、民生委員などが対応

コミュニティが対応



支援員が取り組んでいく部分

「地域おこし協力隊」とは、どう違うんですか？

「地域おこし協力隊」は、都市から地方に移住して、地域協力活動を行いながら、定住を図る取り組みです。住民が増えることによる地域の活性化をめざしています。

日田市集落支援員

折居 弘滋 さん
（支援員3年目、前津江地区）

私の仕事は、地域での課題や意見、要望をまとめ、それを解決するために地域内の人々や行政などと話し合いを進め、実行していくことです。

集落支援員に就任した最初の仕事は、地域を把握するために、市の職員と一緒に地域を訪問し、地図に家や家族構成を記入することでした。

実際、訪問してみると、高齢者のみの家が多く、また、独居の高齢者も多く住んでいることがわかりました。

こういう実態の中で、高齢の方は住み慣れた前津江の中でいつまでも住み続けようと、できるだけ他人に頼らずに自力で

なんとかしよう頑張っています。こういった高齢者は少しの手伝いがあれば、自宅で安心して暮らし続けることができるのです。

とはいえ、集落支援員はなんでもしてくれるボランティアではなく、個人のための集落支援員ではないことを理解していた上で活動しています。

集落支援員になって一年目はとても大変で、初めての訪問では警戒され、「あんた誰かい？」と言われる、三回、四回と通うことで、やっと玄関に入れてもらえました。

それでも、何回も通って話していくうちに、「実は、あれができていくうちに、」など、相談され、個人や地域の解決すべき課題が見えてくると同時に、住民の方との信頼関係を少しずつ



高齢者世帯への声掛け

つ築けるようになってきました。これからの活動としては、継続が難しく行政に任せっきりになっていた祭りや地域行事などを、みんなができるようなやり方に変える工夫を行いたいと思います。

私は、行政でできる事は行政にしっかりと行ってもらう、地域内の自分たちで解決できることは行政に頼らずしっかりとやっけていける仕組みを作りたいと考えています。

そして、住民の方には些細なことであっても自分たちで助け合って解決できるという達成感と連帯感を持ってもらい、こういった活動が地域にゆっくりと少しずつ浸透していくことが大切だと思えます。そして地域のみんなで力を合わせ、20年後の住みやすい場所づくりをしていきたいと思えます。

（折居さんのある一日）

- 8:30 前日の協議内容の整理と訪問記録、連絡事項などを含め日報の作成
- 10:00 地域巡回⇒〇〇宅（補助制度の相談）
〇〇宅へ訪問（草刈りの相談）
- 12:15 昼食
- 13:00 協議⇒「前津江ふるさと祭」打合せ⇒住民自治組織立ち上げの打合せ
- 15:00 地域巡回⇒〇〇地区お宮祭りの手伝い
- 15:30 作業終了後、一旦業務終了
- 19:30 「ふるさとまつり実行委員会」に出席
- 21:00 業務終了

平成31年度 玖珠町臨時職員の募集

■募集職種及び業務内容など

職 種	賃 金	勤務時間	仕 事 内 容	備 考
一般事務職	6,800円/日	午前8時30分～午後5時	一般事務補助 パソコン入力など	障がいのある人を含む ※①参照
一般事務職 わらべの館 久留島武彦記念館 その他公共施設	6,800円/日	午前8時30分～午後5時 ※土日祝日勤務があります。		
保健師	9,200円/日	午前8時30分～午後5時	保健師業務全般など	保健師・看護師 免許必要 ※②参照
看護師	7,800円/日		看護師業務全般など	
栄養士	7,400円/日	午前8時30分～午後5時	学校給食栄養士業務全般など	栄養士免許必要
清掃員	5,400円/日	午前8時～午後4時	庁舎などの清掃業務	
学校給食調理員	6,000円/日	午前8時30分～午後4時15分	学校給食調理業務全般など	※③参照
小・中学校 臨時専科教員	8,090円/日	午前8時20分～午後4時50分	小・中学校での教科指導など	教員免許必要 ※④参照
学校用務員	6,000円/日	午前8時20分～午後4時50分	学校施設の維持管理、用務、事務補助	※③、④参照
特別支援教育 支援員	6,400円/日	午前8時20分～午後4時50分	学校生活に支援が必要な児童生徒の援助、見守りなど	※③、④参照
I C T支援員	6,800円/日	午前8時20分～午後4時50分	小・中学校での電子黒板などの情報機器の操作支援など	※④参照
くす星翔中学校 一般事務職	6,800円/日	午前8時20分～午後4時50分	スクールバス運行管理業務など	※④参照

※①障がいのある人の募集要件

- ・身体障害者福祉法第15条に定める身体障害者手帳、療育手帳制度（昭和48年9月27日厚生省発児第156号厚生事務次官通知）に定める療育手帳又は精神保健福祉法第45条に定める精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている人。
- ・賃金、勤務条件などは、職場によって異なる場合があります。

※②配置部署によっては、土・日・祝日勤務がある場合があります。

※③小中学校の長期休業中（夏休み・冬休みなど）は、勤務のない日があります。

年間勤務日数：学校給食調理員・特別支援教育支援員・学校用務員は概ね210日

※④各学校の定める始業時間により、勤務終了時刻が前後します。

また、各学校行事により、勤務日が変わる場合があります。

■募集人数 全職種それぞれ若干名

■勤務場所 玖珠町役場本庁、町立小中学校、学校給食センターなど

■任用予定期間 2019年4月1日～2020年3月31日

■勤務条件 賃金など：上記職種賃金に準ずる・通勤手当支給有 休 暇：勤務期間に応じ年次有給休暇などがあります。 そ の 他：法定の社会保険制度に加入します。

■申込方法 市販の履歴書に写真を貼付し、写真の上部に希望職種を『朱書き』してください。※備考欄に免許必要と記載されている職種は、各免許証の写しを添付してください。

■提出場所：玖珠町役場2階 総務課総務係

郵送の場合：〒879-4492 玖珠町大字帆足268番地の5
玖珠町役場総務課総務係宛て

■受付期間 2月1日（金）～2月20日（水） 必着

■試験日 2月24日（日） ■選考方法 面接試験等（10分程度）

※詳細な受付時間及び受験会場は別途受験票を交付します。

☎ 総務課 総務係 ☎(72)1111

多くの自治体で
活用されています

- ・県内では18自治体中10自治体が、集落支援員制度を活用しています。
- ・集落、地区での課題や問題は様々で、各自自治体とも、独自の取り組みや、他自治体の優良事例を取り入れるなど、創意工夫が行われています。地域の「世話役」の存在が求められています。

地域づくりは 自らの手で

以前は、家庭や地域で、若者や子どもが多く、「青年団」「婦人会」などの組織が、様々な場面で、地域を支え、盛り上げてくれました。

しかし、少子・高齢化の弊害で、例えば「共働きで地域の祭りに参加する余裕がない」、「地区の出事でことに来る人が少なく負担が大きい」など、地域での支え

合いが難しくなった結果、行政や関係機関に要望・依存する傾向が強まったように思われます。

一方で、将来的には人口の減少により、行政機能の見直しも余儀なく進められ、要望しても実現しにくい時代が訪れます。

このような中で、町は10年、20年後も、元気な地域であるための体制づくりを見据えて、「集落

支援員制度」の導入を検討しています。

この制度は、支援員と地域の様々な組織との連携や、住民の人々の協力があつて、初めて地域の中に根付き、実を結びます。

高齢になつても、過疎でも、安心して地域で暮らせる地域づくりのために、これまでにない新しい形の方策や体制を、みんなで考え、作り上げていく時代を迎えています。